

「フェリブリージュ」運動の形成とその理念 — 地域言語復興活動に内在する政治理念〈フェデラリズム〉をめぐって —

福 留 邦 浩

はじめに

第1章 「フェリブリージュ」の形成

第2章 フェデラリズムとフェリブリージュ・ルージュ

第3章 フェデラリズム宣言

第4章 ドゥヴォリュエによる組織改革

まとめ

はじめに

1960年代から1980年にかけて、フランスのラングドックを中心に「オクシタン運動」と呼ばれる政治的・経済的要求をかかげる一連の社会運動が展開された。この一連の運動は、1962年のドゥカーズヴィルの炭鉱閉鎖反対闘争や1970年代のラルザク軍事基地拡張反対闘争、1976年のブドウ栽培業者らの輸入ワイン反対闘争およびそれらに付随する活動を指すものである。これらの運動には当該問題の当事者らにとどまらず、この地域固有の地域言語であるオック語を復興する活動に従事する「オクシタニスト」と呼ばれる人々が参加していた。彼らはラングドックだけでなく、オック語が通用する地域全体を「オクシタニー」と称し、「フランス」への対決姿勢を闡明にしたのであった。しかし1980年に入ると運動全体が停滞気味となり、オック語の復興活動だけが目立つようになる。それを社会学者のアラン・トゥレーヌらは「運動のフェリブリージュ化」と表現して厳しく批判したのである。

これは政治的・経済的闘争としての側面が可視化せず、言語復興運動という文化的な領分での活動のみが残っているような状況を、運動の後退として捉えているものと言えよう。しかしそのような把握が果たして言語復興運動を正当に評価していると言えるであろうか。そのような問題提起に基づいて筆者は先に拙稿を公表した¹⁾。そして結論として、「フェリブリージュ」

そのものの再検討という課題が浮かび上がってきたのである。

中嶋茂雄氏は「オクシタン運動」と「フェリブリージュ」の関係について、「現在オクシタニストを称する人々はフェリブリージュに批判的であるのが普通で、それに対抗するものとしてオクシタニズムを主張する。フェリブリージュには歴史の現実から乖離した過去執着的な傾向があるのはたしかであり、またオクシタニズムとの違いをいくつも指摘できる。しかし（中略）オクシタニズムの特色のほとんどをフェリブリージュ、特に19世紀のフェリブリージュのなかに認めることができ、むしろ現代のオクシタニズムといえども、フェリブリージュの刻んできた歴史の遺産の上に発展したといえる。フェリブリージュのことを純粋な文学運動であったとして簡単にかたづけしてしまうならば、オクシタニズムの理解は不十分なままに終わることになる」²⁾と主張している。中嶋氏の主張からも、「オクシタン運動」は「フェリブリージュ」運動までも含めてトータルに考察すること、そして「フェリブリージュ」をフランス文学史における「純粋な文学運動」としてではなく、その政治的な側面にも目を向ける必要があることがわかる。

本稿では、フランスの地域言語の一つオック語の復興を目的とした運動である「フェリブリージュ」の形成とその展開について、その活動家らの政治信念に着目して考察する。ここでは、その設立時から活動を牽引したミストラルが亡くなる1914年ころまでの「フェリブリージュ」の活動を政治との関係から考察を行うこととする。

第1章 「フェリブリージュ」の形成

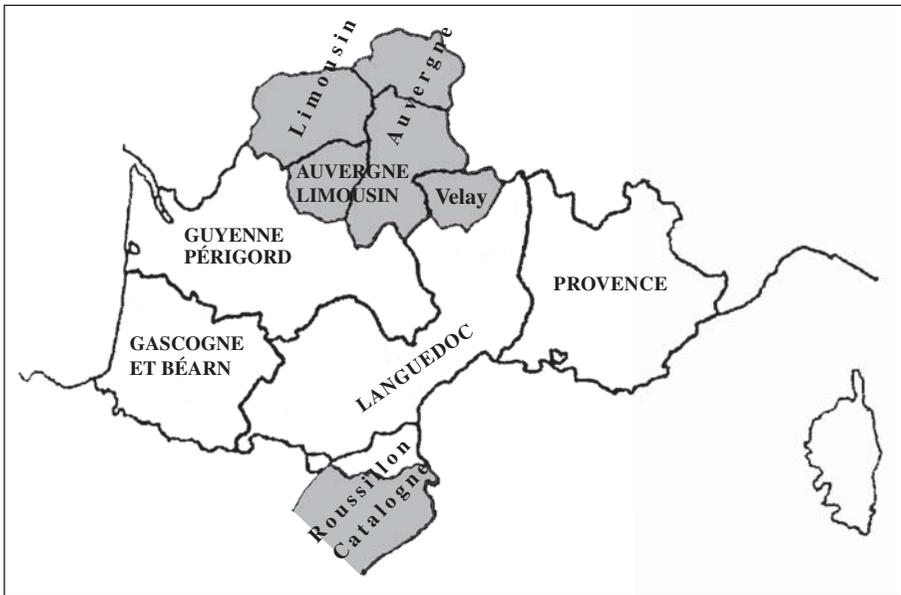
「フェリブリージュ」は、1854年5月21日、アヴィニョン近郊において、ミストラル Frédéric Mistral, ルーマニーユ Joseph Roumanille, オーバネル Théodore Aubanel らオック語による文芸創作をおこなう作家や詩人たちによって設立された文芸団体である³⁾。当時のオック語による著作活動の中心地はマルセイユであった。その意味からすると、「フェリブリージュ」はその創設当初、「フランス」においてはもちろん、「プロヴァンス」においても「小さな周辺のグループ」に過ぎなかった。しかしミストラルの『ミレイユ』がバリの文壇で評価されると、たちまち「フェリブリージュ」はオック語復興運動の中心として認知された⁴⁾。

「フェリブリージュ」が団体としての体裁を整えるのは、規約が作られる1862年ごろからである。カラメルとジャヴェルによると、フェリーブルとなる資格は「プロヴァンスに対する愛情を《卓越したやり方で》示す」ことであり、その人数は「秘蹟^{サクラメント}」的に制限されていたという⁵⁾。すなわち、「フェリブリージュ」の創設者を7名とすることにより、ミストラルらはこの「7」という数字にこだわった。規約の条文の数も1862年の7箇条から1876年には「7」の倍数の49条に改めている。また組織は7つのグループに分けられ、それぞれに7人のフェリーブルが

「フェリブリージュ」運動の形成とその理念（福留）

所属した。この49人の頂点に来るのが^{カプリエ}capoulierと呼ばれる代表である。1876年に規約が改正されると、カプリエおよび49人、計50名のフェリーブルによって、組織の最高機関として^{コンシストワール}consistoireが構成される。彼ら幹部クラスのフェリーブルらは^{マジョラル}majoral (*pl.majoraux*)と呼ばれ、任期は終身とされた。前任者が亡くなるとコンシストワールの選挙によって補充される。したがって、マジョラルは常に49人である。一方、カプリエと書記と会計係は3年ごとに選挙される。ただし再選は可能であった。マジョラル以外のフェリーブルは^{マントゥヌール}mainteneurとよばれるようになる。これは言うなれば中堅会員である。マジョラルとは違ってこのマントゥヌールの人数には制限はなかった。コンシストワールが「フェリブリージュ」の中央統括機関であるとする、地方には^{マントゥナンス}maintenanceとよばれる支部会が置かれていた。1877年には「プロヴァンス」、「ラングドック」、「アキテーヌ」そして「カタルーニャ」の4つのマントゥナンスがあった。マントゥナンスはその後、増減を繰り返し、2009年現在は7つである。さらにマントゥナンスは複数の「エスコロ *escolo (école)*」という単位に分かれている⁶⁾。

地図 マントゥナンスの地図



(備考)・1911年現在のマントゥナンス：ガスコーニュ・ベアルン、ギエンヌ・ペリゴール、ラングドック、プロヴァンス
・1914年現在のマントゥナンス：オーヴェルニュ、リムーザン、ヴレー（2009年現在、ヴレーは廃止）
・1921年現在のマントゥナンス：ルーシヨン・カタローニュ
(出典)：Calamel/Javel, *op.cit.*, p.95.

まず、「フェリブリージュ」は具体的にどのような活動をしていたのであろうか。重要な活

動としては、年一回開催する「聖エステル祭」がある。これは「フェリブリージュ」設立の日とされる5月21日の守護聖人が「聖エステル」であるところから、1876年アヴィニオンで開催されたのが始まりである。現在では「^{パントウコット}Pentecôte 聖霊降臨の主日（ペンテコステ）」に開催される。以降、毎年南仏中の都市を持ち回りで開催される。その日にコンシストワールや総会が開催される。また、守護聖人を称えるためのミサがフェリブリージュ会員の聖職者によって執り行われる。ミサの説教と聖歌の歌唱では、ラテン語ではなく、オック語が使用される。祭典は最後、「宴会 banquet」で締めくくられる。宴会の最後にカプリエが演説を行い、「フェリブリージュ」の公式の声明として重要である⁷⁾。

では、どの程度の人数が所属していたのであろうか。その実数を正確につかむのは難しいが、カラメルとジャヴェルはマントウナンスごとにマントウヌールの実数をまとめている。

EFFECTIFS DES MAINTENEURS (1881-2001) マントウヌールの実数

Maintenances	1881年	1912年	1921年	1933年	1942年	1946年	1975年	1993年	2001年
Auvergne	-	-	84	109	48	49	60	65	75
Limousin	-	12	24	126	105	110	224	194	139
Gascogne Et Bearn	-	198	75	23	132	132	155	75	59
Guyenne Et Périgord	53	58	26	38	19	18	111	128	125
Languedoc	157	198	268	327	220	220	284	214	208
Provence	207	311	482	671	601	525	1,175	1,448	1,234
Roussillon- Catalogne	3	-	25	144	82	97	75	43	14
Velay ※	-	-	42	46	-	-	-	-	-
計	420	777	1,027	1,484	1,207	1,151	2,084	1,484	1,854

(備考) 現在ヴレーのマントウナンスは廃止されている。

(出典) Calamel/Javel, *op.cit.*, pp.87-88. 掲載の表をもとに、筆者作成。

この人数については補足すべきことがある。フェリーブルには会費納入の義務が存在した。1862年段階で年間20フランである。1905年にはマジョラルは年に10フラン支払うことが規約に明記されている⁸⁾。会費を支払わなければ除名されてしまう。カラメルとジャヴェルによると未納者が多く、フェリーブルの数の増減もその点を考慮しなければならない。さらに彼らは、この会費がネックとなって農民や労働者のフェリーブルが少ないとも分析している⁹⁾。

フェリーブルのなかで最も多いのはどのような階層の出身者であろうか。カラメルとジャヴェルによると、中小ブルジョワジー、とりわけ公務員であるという。しかし、注目すべきはサラリーマンと商人である。南仏の中小の都市において、彼らの占める割合は増大しつつあり、

彼らも「フェリブリージュ」に加入することで、社会的な威信を獲得することができたと言われている。一方、企業主、銀行家、貴族、聖職者はそれほど多くないという¹⁰⁾。

次に、「フェリブリージュ」の設立目的を見てみたい。1876年の規約においては次のように規定されている。「フェリブリージュは、作品によってオックのくにの言語を救うすべての人々を、またこれらのくにの利益のために研究し仕事をする学者や芸術家を糾合し、鼓舞するために設立された」¹¹⁾と。したがって、オック語の衰退に歯止めをかけるという点については、組織メンバー相互の共通理解が存在していたと言ってよい。しかし、政治や宗教についての見解には微妙なニュアンスが存在しており、そのことが「フェリブリージュ」の組織としての性格に大きく影響を与えていた。

「フェリブリージュ」の特徴として、その「非政治性」が指摘される。たとえば1992年から2006年までカプリエを務めたピエール・ファールブ *Pierre Fabre* は、あるインタビューのなかで、「フェリブリージュ」と政治のかかわりについて、次のように語った。「フェリブリージュは、決していかなる政党活動にも参加したことはなかったし、特別扱いをしたこともありませんでした。（中略）『フェリブリージュはあらゆる政党の外で活動する。また、フェリブリージュはすべての政治の外で生まれ、その外にとどまらねばならない』とミストラルは語っています」¹²⁾と述べている。このことから、組織としての「フェリブリージュ」が非政治的な態度をとるのは、ミストラル以来の伝統であるという見解を読み取ることができよう。

では、「フェリブリージュ」が政治的に中立の立場を貫くのはなぜなのであろうか。その点について、以下、「フェリブリージュ」設立当初の個々のフェリーブル（プリマディエ *Primadié*）の政治信条や宗教的感情に焦点を当てて考察することで明らかにしたい。

ミストラルと同様に「フェリブリージュ」設立の立役者であったルーマニューは政治的には熱心な王党派で、宗教的には敬虔なカトリックである。1855年には出版も行う書店の経営に乗り出している¹³⁾。一方、オーバネルは政治的には共和主義であるが、宗教的にはカトリックである。このカトリックへの信奉は彼の出自にも起因している。オーバネルの家系は代々アヴィニョンの法王庁御用達の印刷所を経営する名士であった¹⁴⁾。ルーマニューとオーバネルの両者は、宗教的には大革命以来、とりわけ第三共和制によって推進された反教権主義には反対するという点において共感し合う可能性を持っていたが、政治的信念に関する限りまったく相容れないものであった。すなわち一方はアンシャン・レジームを支持する王党派であり、一方は革命以来の中央集権的な共和派を支持する点において、両者の意見は大きく対立していたと言えよう。

ではミストラルの場合はどうか。彼はマイヤヌ（アヴィニョンとアルルの中間地点にあたる）の地主の息子である。そして1848年の二月革命を契機に共和主義への共感を深めていく。とはいえ、その共和主義への姿勢には一貫性が見られるとは言いがたい。ミストラルは、1848

年5月13日のルーマニユに宛てた書簡の中で、「ここ1ヶ月来、私の思想には多くの変化がある。共和国とそれを指導する者の良き信念を信じていた私は・・・大いに落胆している。確かに私は共和国を常に愛しているが、人間に関する私の意見はもはや同じではない・・・」¹⁵⁾と記している。ただ、ここでいう「落胆」とは、共和主義ないし共和国の理念に対するそれというよりも、むしろそれらの理念を担う「人間」すなわち政界関係者たちへの「落胆」を意味するものであった。

この「落胆」は1851年12月2日のルイ・ナポレオン（後のナポレオン3世）のクーデタによって強められ、ミストラルの政治への関心それ自体も薄らいでいくことになる。同時に、同年エクサンプロヴァンスの法科大学を卒業したミストラルは、それまで抱いていた弁護士になる考えも放棄し、故郷マイヤヌに戻って『ミレイユ』の制作に没頭するのである¹⁶⁾。このように、ミストラルは政治への関心を後退させながらも、第二帝政を通じて時の政治体制と微妙な距離をとりつつ、基本的には共和主義（共和国）を支持する立場をとっていた。

しかし、この共和主義への共感にまたも大きな翳りが生ずる。1867年、ミストラルはパリを訪れ、政界関係者らと接触するが、このときに共和主義への疑念を確かなものにしたと言われている。というのも彼らはいずれも中央集権主義的な考え方の持ち主ばかりであったからである¹⁷⁾。

ところで、初期の「フェリブリージュ」結成に参加したのはルーマニユ、オーバネル、ミストラルだけではない。定説では、前記3人にポール・ジエラ Paul Giéla, ジャン・ブリュネ Jean Brunet, アンセルム・マチユ Anselme Mathieu, アルフォンス・タヴァン Alphonse Tavan の4人を加えた7人をもって「フェリブリージュ」創立メンバーとされている¹⁸⁾。

ジエラは公証人を生業とし、まとまった作品は残していない。だが、彼は「フェリブリージュ」創立に向けた会合開催の場として、フォン＝セギューニユに所有していたシャトーを提供するなど側面的な支援をおこなっていた¹⁹⁾。

ブリュネはガラス職人で、彼もまたまとまった創作は行っていない。ブリュネに関して注目すべきは、その政治的な立場である。かれは熱烈な共和主義の信奉者であり、その点ではオーバネルと共通すると言えようが、カトリックに対する姿勢は異なっていた。「フェリブリージュ」創設期のメンバーのなかで最左派の人物であると言えよう²⁰⁾。

ブドウ栽培農家の家に生まれたマチユは、アヴィニョンのデュピュイ寄宿学校でミストラルやルーマニユと知り合った。7人中で最年少のタヴァンは「小作農民の息子 *fils de la glèbe* 」であり、他の6人が中級のブルジョワ階級に属し、古典教育を受けていたのに対し、タヴァンは小学校卒業後は農業に従事し、詩作は独学で身に着けたのである²¹⁾。

もとより、「フェリブリージュ」の創設にかかわったのはこの7人だけではない²²⁾。しかしこの組織の活動に大きな影響を与えたのは前記の7人、とりわけルーマニユ、オーバネルそ

してミストラルの3人である。他の4人はいわばアマチュアで、まとまった作品がなかったり、早くに詩作を放棄したり、運動のなかで中心的な影響力を行使しうる立場になかった²³⁾。

「フェリブリージュ」が非政治性を表に出して活動しなければならなかった最大の理由とはなにか。その理由は、彼ら3人のスタンスに微妙な相違が存在していた点に求めることができるだろう。そして彼らの抱く政治的主張ないし立場は、その後の「フェリブリージュ」の性格に微妙な影を落とすことになる。

これまで考察してきたように、政治性を表に出すと「フェリブリージュ」創設者に限定してさえ、その政治的立場はさまざまであり、「フェリブリージュ」という組織をまとめることは難しい。そこで「オック語の復興」という目的を押し出すことで大同団結をはかることを考えた。しかし「オック語の復興」を具体的に実行しようとするれば、そこに政治とのかかわりが生じることは否めない。アンリ・ジオルダンは、15世紀半ばから「フランス語は、その体系化・規範化にじゃまになるような言語の使用すべてをみくだしながら、形づくられ、発展し、普及してきた。文化政策がフランスの近代国家建設史と緊密に結びついていたので、フランス語は国語として厳格に育成された」²⁴⁾として、オック語の抑圧がフランスの中央集権的国家建設と密接に結びついていることを問題にしている。そこで「オック語の復興」のためには、言語的要求にとどまらず、中央集権に反対する政治的要求が出現するのである。

特定の政党や政治的立場に組織レベルで組することをせず、政治活動に一線を引いているという意味においては、「フェリブリージュ」は「非政治的」であるとは言えよう。しかし、個人レベルで見ると「フェリーブル」らの政治的主張は角逐しており、しばしば彼らの政治的主張が「フェリブリージュ」の活動に大きく影響しているのである。

そこで、どのような政治的主張が「フェリブリージュ」とかかわりながら主張されたのかを次に見ていきたい。

第2章 フェデラリズムとフェリブリージュ・ルージュ

第1章で、「フェリブリージュ」創立時のフェリーブルたちが、さまざまな政治的主張にもとづいた背景を背負っていることを確認した。それゆえ「フェリブリージュ」は組織としての求心性に欠けており、その取りまとめの役割、すなわちカプリエの職務を担うためには、政治的な柔軟性を有する人物が適当であったと言えよう。そのような条件に合致する人物としてミストラルが浮上するのは当然のことであると思われる。アブラートの言葉を借りれば、ミストラルは「文学の分野だけでなくイデオロギーに関しても重要な参照枠となっている」²⁵⁾のである。前述の如くミストラルは1848年を前後する時期までは共和主義を、積極的でないまでも支持する姿勢をとっていたが、1867年ごろから共和主義に対して明白に懐疑的な態度を表明す

るようになるのである。

では、ミストラルは共和主義をどのようなものと考えてこれを支持し、後にどのような点に対して疑義を抱くに至ったのであろうか。これらの問いについて考察を進めるにあたり、ミストラルの共和主義の特徴として指摘される「フェデラリズム」をめぐる議論を軸に考察を進めたい²⁶⁾。

最初に、「フェデラリズム」とは何かについて確認しておきたい。「フェデラリズム」の概念を明確に述べることは難しい。それは、個別の事例により千差万別で、一般論にすると多義的になり、明確さに欠ける議論になりがちだからである²⁷⁾。しかし、千葉眞氏は「フェデラリズム」を二つの類型によって区別している²⁸⁾。以下、千葉氏の議論を参照して「フェデラリズム」の概念を確認しておく。

第一の「フェデラリズム」の類型とは、「空間の組織化の原理としての連邦主義」である。もともとラテン語の《foedus》が「契約」、「盟約」を意味するところから、「盟約的連邦主義 *convenantal federalism*」とも呼ばれる概念である。それは「契約を媒介にして節合される恒久性を帯びた結合体」を意味し、国家レベルや「リージョン」だけでなく、「教会や集会、共同体や共同社会、連合組織」などにも適用しうる議論である²⁹⁾。また千葉氏によれば、「空間の組織化原理としての連邦主義」は、参加民主主義的要求に答える「民主主義的規準」、多種多様な人々や集団の権利を守る「多文化主義的規準」、人々や集団が公平に共存できる「多元主義的規準」の三つの規準を満たす必要があるという³⁰⁾。

第二の「フェデラリズム」の類型とは「政治・行政・法的概念としての連邦主義」であり、狭義の連邦主義の概念である。千葉氏はスーザン・ビシェイの議論を援用しているが、これはカール・シュミットの議論に依拠したものだという³¹⁾。シュミットによれば「連邦 (Bund) は、自由な合意に基づく、すべての連邦構成国の政治的自己保存という共通目的のための継続的結合」を意味し、その結合は「連邦条約 (憲法)」の取り決めに拘束される³²⁾。ビシェイによれば、「外交政策、防衛手段、金融政策、関税上の諸規則」については連邦政府が担当し、他の事項については連邦構成国に委ねられ、後者の政治的自律性が保証される³³⁾。

千葉氏によると、第一の「フェデラリズム」の三つの規準を満たし、かつ第二の「フェデラリズム」に見られる分権型の連邦主義論として位置づけられるのが、プルドンの「フェデラリズム」の議論である³⁴⁾。

次にフランスにおける「フェデラリズム」の展開を概観しておきたい。それはフランス大革命の展開過程と深くかかわっている。1789年8月から1790年7月にかけて、全国100カ所以上の地方都市で、農民叛乱に対処することを目的として、各地方都市の代表 (*fédéré*) が交互に集まって連盟集会 (*Fête de Fédération*) を開催した³⁵⁾。国民議会は「フェデラシオンという語が王国の一体性を破壊する響きをもつ」³⁶⁾ ことを危惧し、パリを頂点とした全国連盟祭と

いう形式にすることで地方都市を牽制しようとした。ここで、パリ政府（国民議会）が *Fédération* に対し、非常に神経質になっていることが見て取れる。さらに 1793 年、ジャコバン派のなかの急進派であるモンターニュ派と穏健派のジロンド派の内部対立が激化し、ジロンド派を支持する反乱がノルマンディや南仏の各所で勃発すると、対するモンターニュ派はこの反乱を「フェデラリズム」と呼び、ジロンド派を肅清した。

それ以来、フランスにおいては「フェデラリズム」という言葉は、反革命と結び付けて語られ、「一にして不可分の共和国」を否定するものとして捉えられるのである³⁷⁾。

しかしながら、「フェデラリズム」の理念はジロンド派の肅清とともにフランスから消え去ってしまったわけではなかった。それは、革命後のフランスの中央集権化の動きに脅威を覚え、折しも隣国イタリアの統一の動きにも危機感を覚えたブルードンに継承されている。そして、このブルードンの「フェデラリズム」の理論を継承したのが、ミストラルであった。

ミストラルとフェデラリズムの関係は 3 つの時期に分けられる。すなわち 1860 年から 1870 年にかけて、カタルーニャ復興運動の活動家たちとの接触を契機に展開された「フェデラリズム」、次いで 1870 年代半ばに、ルイ・クサヴィエ・ドゥ・リカルド Louis Xavier de Ricard とオーギュスト・フーレス Auguste Fourès という二人の共和主義左派（いわゆる「フェリブリージュ・ルージュ」）が唱える「フェデラリズム」であるが、カタルーニャ復興運動と疎遠になってから、ミストラルは「フェデラリズム」と距離を置くようになっていた。そのためこの時期、ミストラルを中心とする「フェリブリージュ」は「フェリブリージュ・ルージュ」を除いて、「フェデラリズム」について公式な表明を行わなくなった。その意味ではこの時期の「フェリブリージュ」は非政治性を強めたとも言える。そして 1892 年のフレデリック・アムレットィ Frédéric Amouretti やシャルル・モーラス Charles Maurras らのいわゆる「フェデラリズム宣言 “Declaraciou des Felibres federalistes”」の時期である³⁸⁾。では、それぞれの時期の特徴について詳細に検討していくこととしたい。

ミストラルは思想的には共和主義者として出発したことは既に述べた。したがってミストラルは 1789 年の大革命の成果を基本的には受け入れているが、その共和主義とは、ジャコバン派が主導する時期のそれではなく、ジロンド派主導の時期を指している点が重要である³⁹⁾。これは、ジャコバン派の共和政は中央集権的色彩が濃厚で、フランス国内のさまざまな地域性を排除する傾向が強かったのに対し、ジロンド派のそれは必ずしも地域性を否定するものではなかったからである。ジロンド派を、「フェデラリズム」の系譜のなかで捉えるこのような見方は、ブルードンの影響を受けたことによるものであろう⁴⁰⁾。ブルードンは『フェデラリズム原理』（1863 年）において、ジャコバン派は「一にして不可分の共和国」をつくりあげ、「ジロンド派が喚起した古い地方的フェデラリズムを破壊し、フランスにおける自由を不可能にし、革命を幻想と化したのである」⁴¹⁾と述べている。

もとよりミストラルは、「オクシタニー」のフランスからの分離独立を考えていたわけではなかった。あくまでもフランスという枠組みを維持しながらも、それぞれの地域の独自性——南仏について言えば「オクシタン性」(occitanité)——の保持を中心に考えていたのである。アブラートによれば、ミストラルにとって、フランスと「オクシタニー」の共存を図るための方策こそ、「フェデラリズム」であった⁴²⁾。ミストラルは1870年10月6日付のタヴァンに宛てた書簡において、「私が新体制の事業に参加するとすれば、私は連邦原理 (le principe fédératif) を勝利させるために全力を注ぐであろう。」と述べている⁴³⁾。すなわち、ミストラルは1860年から70年にかけて、フェデラリズムを実現する政体として、「ジロンド主義的共和主義」に理想を見出していたと考えられる。

ミストラルのフェデラリズムの成立に関して、もう一つ指摘しておくべきことがある。それはカタルーニャ復興運動とのかかわりである。

1866年、詩人でカタルーニャ主義の政治家ヴィクトル・バラゲ Victor Balaguer がミストラルを訪問したが、そのまま帰国を許されず亡命者として翌年までプロヴァンスに滞在した。バラゲもミストラル同様フェデラリストであり、共和主義者でもあった。彼らが構想したのは「スペイン」ないし「フランス」といった既成の国民国家の枠を越えた「オクシタニー」と「カタルーニャ」の連邦であり、ヨーロッパレベルの共和主義的連邦とでもよぶべきものであった。彼らは1867年パリを訪問し、ガンベッタら共和主義者たちとの共闘を摸索したのであったが、これは結果的に実現しなかった。というのもミストラルはこのとき、共和主義者たちにせよ帝政支持者たちにせよ、中央集権主義を奉じていることに変わりないことを知ったからである。

結局、彼らの「連邦」構想は頓挫することとなる。ミストラルは不本意にも「分離主義者」のレッテルを貼られ、「フランス」当局から疑惑の目を向けられることとなる。しかし、ミストラルが「フランス」という国境を越えて、カタルーニャとの「連合」を摸索していたのは確かであるが、「フランス」とのつながりもまた維持したいと考えていたのである。

ミストラルにとって、「分離主義者」との非難ははなはだ不本意なものであった。さらにその非難は「フランス」からばかりでなく、「フェリブリージュ」設立にもかかわりが深いウージェーヌ・ガルサン Eugène Garcin からも浴びせられた。一方、バラゲは特赦による帰国後、1868年の九月革命で成立した政府に入閣していたが、スペイン王位継承問題でホーエンツォレルン家のレオポルドを支持したことで、反フランス的態度を取らざるを得なくなってしまった。ここに、ミストラルとバラゲの立場の違いは決定的となった。

これを機に、ミストラルは「フェデラリズム」の議論に関して、公式の表明を行わなくなる。これは前述のようにカタルーニャとの関係が後退したことにより、その熱意も失せてしまったことによる。そして、ルーマニーユら王党派陣営はミストラルを自陣営に取り込むことに成功するのである。しかしミストラルのフェデラリズムは、ルイ・クサヴィエ・ドゥ・リカール

(1843-1911)、オーギュスト・フーレス(1848-1891)に継承されていくことになる。彼らは『ラウセタ年報 *La Lauseta almanach*』というオック語のラングドック方言で編集された雑誌を中心に、共和主義左派に共鳴する人々を糾合しようとする。彼らは共和主義者であると同時に、自由思想家、地域主義者、反教権主義者、ブルドン主義者でもあった。彼らは総称として、「フェリブリージュ・ルージュ」と呼ばれたのである⁴⁴⁾。

では、「フェリブリージュ・ルージュ」の立役者であるドゥ・リカールとはどのような人物だったのかを見ておきたい。

ドゥ・リカールは1843年、パリ東近郊のFontenay-sous-Boisで生まれた。父親は軍人で侯爵、南仏ラングドックの港町Sèteセートの出身である。20歳で文芸雑誌『進歩誌 *La Revue du Progrès*』を創刊する。この雑誌に掲載した彼の論文が、第二帝政を攻撃する内容であったため訴追された。このときの裁判で彼を弁護したのがレオン・ガンベッタであった。判決は禁固3年であった。1866年にはフランス詩の一時代を築く『現代高踏詩集 *Le Parnasse Contemporain*』の発行を出版社から任された。と同時に『ラベル *Le Rappel*』、『クロッシュ *Cloche*』、『デモクラシー *Démocratie*』などの反帝政の立場の諸雑誌に寄稿している。1870年には普仏戦争に反対するパンフレット『フランスの愛国者 *Le Patriote Français*』を出したため再び訴追され、投獄を逃れるため一時スイスへ亡命するが、すぐに帰国し、パリ・コミューンに参加する。コミューン壊滅後2年間、再びスイスに亡命する⁴⁵⁾。

1873年にスイスから帰国後結婚し、これを契機にパリを離れ、南仏モンペリエに居を定めた。共和派の雑誌『ラ・レピュブリック・デュ・ミディ *La République du Midi*』に寄稿する一方で、アルビジョワ十字軍への関心を深め、また「フェリブリージュ」に関心を寄せ、1876年にマントゥヌールとなった。しかし「フェリブリージュ」が王党派のルーマニーユを中心に運営され、同年のコンシストワールで定められた規約により、「フェリブリージュ」の会合において政治的、宗教的議論を禁じられたことに反発し、独自の雑誌『ラウセタ年報』を発行したのである。これは「フェリブリージュ」内に大きな波紋を巻き起こした。ルーマニーユら王党派でカトリックを標榜するフェリーブルらが『ラウセタ年報』の発行を規約違反だとして強く非難したのである⁴⁶⁾。

1880年妻を亡くし、さらに1881年8月の総選挙に社会主義陣営の候補者として、エロー県のベジエから立候補したが落選した⁴⁷⁾。翌1882年、心機一転を図って南米に移住したものの1886年には帰国した。南米滞在中もフランスへ帰国後もさまざまな新聞・雑誌を自ら経営したり、他紙への寄稿などを続けた。1897年南仏を離れパリに居住するが、健康悪化のため1906年南仏に居を構え、1911年にマルセイユで死去した⁴⁸⁾。

「フェリブリージュ・ルージュ」が活動していたのは1876年から1885年にかけてである。なぜこの時期にこのような動きが生じたのであろうか。そこには「フェリブリージュ」内部の

事情だけでなく、第三共和政の危機という社会的な理由がからんでいるのではないと思われる。

なぜならば、1873年に王党派によって王政復古が企てられるという一件があり、これを大統領マクマオンが援護するという事態が出来たからである。この企てはシャンボール伯がブルボン家の白旗の採用にこだわり、三色旗を拒むという頑迷固陋な対応のせいで頓挫し、結果として未遂に終わった。普仏戦争敗戦直後の国民議会は、ブルボン家とオルレアン家をふくめた王党派の議員が6割を占めるという状態にあり、王党派のマクマオンが大統領となるにおよんで王政復古もあながち荒唐無稽なことであったとは言えない状況にあった。その後1876年の下院の総選挙で共和派が勝利すると、マクマオンは議会の解散・総選挙に打って出たが、このとき「無秩序に対する秩序の戦い」と称し共和派を弾圧する挙に出たのである⁴⁹⁾。王党派が多数派となりつつある「フェリブリージュ」内の共和主義者らを糾合しようという動きは、このような共和政崩壊の危機を背景にしていたのである⁵⁰⁾。

このような「フェリブリージュ・ルージュ」の動きにミストラルは同調しなかった。ミストラルやオーバネルら、思想的近縁にあると思われる旧世代が、「フェリブリージュ・ルージュ」の動きに同調することはなかったのはなぜであろうか。旧世代と「フェリブリージュ・ルージュ」とは思想的に重なり合うものと言えるであろうか。両者の間には糾合することのできない思想的な違いが存在するのではないだろうか。その点について考察したい。

まず、フランスの中央集権的システムに対する評価の違いである。前述のようにオーバネルは共和主義者としてフランス革命以来押し進められてきた中央集権的国制を支持している。しかし、ドゥ・リカールらは中央集権に反対し、「フェデラリズム」の思想を標榜する。ドゥ・リカールの「フェデラリズム」は、前述のジロンド派を淵源とするブルードンのそれに連なるものであり、ジャコパン的共和主義を制度化した第三共和政とは鋭く対立する⁵¹⁾。地方の自主性を尊重するという点において、アンシャン・レジームの「州」復活を目指す王党派と「フェデラリズム」の主張は共通している。したがって、政治的立場の違いを越えて両者が結合する可能性は存在する。この点については次章で詳細に検討したい。

次に考察しなければならないのは、カトリックに対する旧世代と新世代の間の齟齬である。すなわち旧世代は敬虔なカトリックであり、カトリックを個人の信仰の問題というよりも、「歴史的、政治的なパースペクティブ」にかかわる問題と捉え、一方、ドゥ・リカールは前述のように、反カトリックの姿勢を示していた。彼はカトリックを「危険なもの」と捉えていた⁵²⁾。というのも教会こそ現在の諸悪の根源であると考えたからである。なぜそう考えるのであろうか。ドゥ・リカールは、かつて南仏一帯に存在していた「カタリ派」に多大な関心を寄せていた⁵³⁾。異端審問をおこなったカトリックへの敵意は極めて強かった⁵⁴⁾。「カタリ派」は徹底した二元論を唱え、この世は悪によって支配されるものであるとする。したがって、この世にお

けるキリストの代理たる教皇を頂点とする聖職者の秩序を否定していた。それゆえローマ教皇によって異端の烙印を押され、ルイ9世率いるいわゆる「アルビジョワ十字軍」により「カタリ派」は殲滅されたのであった。ドゥ・リカールの「カタリ派」への関心は、「反カトリック」という点において、反教権主義を標榜する第三共和政への共感と両立しうるものであったと考えられる。共和主義者オーバネルとは、第三共和政を支持するという点で「フェリブリージュ・ルージュ」と協力することもできたと思われるが、オーバネルは前述のように熱心なカトリックであり、その点で両者の協力は不可能であったと思われる。

オーバネルやミストラルが、「フェリブリージュ・ルージュ」に参加していないという点では、「フェリブリージュ・ルージュ」は共和主義左派の人材を糾合することに成功しているとは言い難い。しかし、ドゥ・リカールの「フェデラリズム」はミストラルの思想を継承していることは否めない。彼は自らを「ラテン人」と宣言し、地中海沿岸の《人種 la race》を構成単位とする「連邦」を構想した⁵⁵⁾。これは前述のミストラルにおけるカタルーニャとオクシタニーを中心とする連邦構想を継承したものと言ってよい。では、彼は「フランス」と絶縁することを望む分離主義者なのかという点も必ずしもそうではない。ドゥ・リカールは「フランス」の中央集権的なシステムを強く非難しつつも、分離主義に対してはむしろ強くこれを拒絶している⁵⁶⁾。この点においてもミストラルを継承していると見てよい。

ミストラルの「フェデラリズム」構想は、ブルードンのそれに思想的影響を受けたものであることは既に述べた。ドゥ・リカールのそれもまた、ミストラルとの関係から見て、ブルードンの思想的影響下に位置づくものと考えられよう。

ここでブルードンの「フェデラリズム」について考察してみたい。ブルードンの「フェデラリズム」は「契約」にもとづいて形成される社会システムであったと見ることができる⁵⁷⁾。ジュリアン・ライトによれば、ブルードンの「フェデラリズム」は「個人とコミュニオン、コミュニオンと地域、地域と国家の間における相互的契約を強調することで民主主義を現実化する」ものであるという⁵⁸⁾。では、「フェデラリズム」を構成する「契約者」とはだれか。ブルードンはその著書のなかで、「家族の長、コミューヌ、カントン、地方、国家」をあげている。その「契約」は「双務的 synallagmatique」なものであり、契約者は相互に対等な立場にある。ここで注目すべきは個人と国家の関係においても「双務的」、「相互的」でなければならないという点である。

これは、「個人」の主権は国家との契約によっていささかも制限されることがないということの意味しているのである。「契約」の当事者として、とくに「個人」のみならず、「集団」や「地方」についても「契約」の当事者としての資格を認めている点が重要である⁵⁹⁾。ブルードンは『連邦主義原理』の「結論」において、「中央権力としての連邦権力は個人や集団、地方の自由を吸収し得ないが、それらは中央権力に先立って存在している。それらこそ中央権力を生み出

し、支えているのである」⁶⁰と述べている。これは、権利の主体として「個人」以外の中間団体の存在を認めない、ジャコバン的な中央集権的国家体制に対するアンチ・テーゼと見ることができる。しかも、ブルードンの「フェデラリズム」の構成単位はなんらかの歴史的な背景を持つ、伝統に根ざしたものである。すなわち、ジャコバン的な中央集権体制により伝統的な「地方」は解体され、「県」に分断され、中央より派遣される「県知事」に支配される現状における処方箋がブルードンの「フェデラリズム」であった。そしてミストラルを介してブルードンの「フェデラリズム」の思想を受け継いだのがドゥ・リカールであったとすることができる。

しかしながらドゥ・リカールは1881年の総選挙で落選し、翌1882年に南米へ渡ったことは前述した。さらに、ドゥ・リカールの師であるミストラルが、「フェデラリズム」に関して公式の表明を行わなくなっていたことともあいまって、「フェリブリージュ・ルージュ」の運動は急速に求心力を失うことになる。結局、『ラウセタ年報』はドゥ・リカールが南米から帰国するのを待たずに1885年に終刊するのである。また、この時期における「フェリブリージュ」の多数派は、ルーマニーユら王党派であり、ドゥ・リカールが姿を消したことでその傾向はますます鮮明なものとなった。1888年、ミストラルの後を継いで第2代カプリエとなったのはルーマニーユであったことも流れとして当然のことであろう。しかし、ルーマニーユが1891年に亡くなると、その後継カプリエとなったのは共和主義者のフェリックス・グラ Félix Gras であった⁶¹。このことは「フェリブリージュ・ルージュ」の復活を意味するのであろうか。

グラと「フェリブリージュ・ルージュ」とのかかわりは微妙である。ドゥ・リカールは、フーレスに宛てた1876年1月の書簡のなかで、右傾化するフェリブリージュ内部に、自分たちの意向を反映するグループをつくるにあたり、その核としてグラの名前を挙げている⁶²。しかし、グラ自身は「「フェリブリージュ・ルージュ」の「フェデラリズム」には距離をとろうとしている。グラは1891年の演説で、「われわれには一人の母親しかいない、それはフランスである。（われわれには）ひとつの祖国しかいない、それはフランスである」⁶³と述べている。また、「フェデラリズム」に関して、「それは一つの幻影である」⁶⁴とも述べている。つまり、グラとドゥ・リカールのつながりは「フェデラリズム」の理念を共有することによるものではなかったと言える。

では、何が両者を結びつけるのか。それは前述の「カタリ派」への強い関心に他ならなかった。「カタリ派」への強い関心は反教権主義すなわち反カトリックという立場と結合することにより、反教権主義を標榜する第三共和制への忠誠とも両立する⁶⁵。しかし第三共和政への忠誠という点で、まさにグラの立場はドゥ・リカールのそれと対立するのである。グラはミストラルが標榜した非政治性の立場を受け継ぎ、政治的に先鋭化する可能性を秘めた「フェデラリズム」に慎重な姿勢をとっていた。そのグラのカプリエ就任祝賀会が翌1892年に行われた。この席上で、シャルル・モーラスやフレデリック・アムレットィら若いフェリーブルらが演説⁶⁶を

おこなった。これが「フェデラリズム」を真正面からとりあげた、いわゆる「フェデラリズム宣言」である。

ドゥ・リカールら「フェリブリージュ・ルージュ」が主張する「フェデラリズム」の理念は政治的行動を導き出す可能性を持ちながらも、「フェリブリージュ」主流派とはならず、主流派は運動をオック語復興に限定しようとする「非政治性」を打ち出すという構図が浮かび上がってくる。しかし、ドゥ・リカールの「フェデラリズム」の理念はモーラスら次世代のフェリブルによって再び取り上げられるのである。

第3章 フェデラリズム宣言

これまでに、ミストラルの政治的思想が、ドゥ・リカールら『ラウセタ年報』を拠点とした「フェリブリージュ・ルージュ」に継承されながらも、ドゥ・リカールの南米移住による活動の求心力の低下が災いして、挫折したことを確認した。しかし、その思想的系譜はそのまま途絶えたわけではない。ここでは、ドゥ・リカールの「フェデラリズム」がどのようにして次世代に継承されていったのかを考察することとする。

ドゥ・リカールの『ラウセタ』紙を拠点とした活動が終息したと言っても、彼がまったくあらゆる活動から逼塞してしまったというわけではない。南米から帰国したドゥ・リカールは、1888年「フェリブリージュ」のマジョラルとなり、前述したようにいくつかの新聞雑誌の編集や記事の寄稿などのジャーナリズム活動に携わっている。しかも、ドゥ・リカールはモーラス⁶⁷⁾らの「フェデラリズム宣言」に賛同の署名をするという行動をとっている。また、後輩のペルボスク Antonin Perbosc やエスチウ Prosper Estieu もドゥ・リカール同様に共和主義者であるが、ドゥ・リカールに倣って署名しているのである⁶⁸⁾。

他方で、伝統的共和主義者（いわゆるオボルチュニスト）や急進派（ラディコー）は1793年への忠誠を表明して「フェデラリズム宣言」には反対し、極左がこれに賛成するという現象が見られるのである⁶⁹⁾。ここには共和派と王党派の対立という構図よりもむしろ、第三共和制成立から20年以上を閲し、安定した保守勢力となった共和派と社会主義陣営寄りの極左勢力の対立という、共和派内部の分裂という構図が浮かび上がってくるように思われる。

さらに、ドゥ・リカールらとモーラスらとの共通点として、政治的活動への志向性を指摘することができよう。そもそも「フェリブリージュ」はその目的としてオック語にかかわる活動を顕彰し、失われつつあるオック語を活性化させることを掲げていた。そこには、ややもすると非政治的な文芸活動やフォークロアの探求へと傾くきらいがあった。しかし、一方にそのような傾向に異を唱える流れも存在していた。ドゥ・リカールら「フェリブリージュ・ルージュ」は後者の系譜に連なるものであった。従来、「フェリブリージュ・ルージュ」が政治へのアンガー

ジュマンを志向するのに対し、むしろアクチュアルな問題への取り組みを排して過去賛美的な活動を志向する流れは、「ルージュ」に対し「ブラン」と称されてきた。モーラスは一般にこの「フェリブリージュ・ブラン」に分類される⁷⁰⁾。しかしそう単純に分類することはできない。なぜならば、モーラスは必ずしも懐古趣味的なフォークロアに自らの活動を特化していたわけではないからである。むしろ、ミストラルやグラが志向した「フェリブリージュ」の非政治化を強く非難するものが「フェデラリズム宣言」であった。

ここで、その内容を見てみたい。アムレットティによるグラのカプリエ就任を祝う演説は、新カプリエのグラへの賛辞でなごやかに始まったが、すぐに参加者たちを凍りつかせるような内容が繰り出されてくる。「われわれは、兄弟の前や文学者の集まりで語るのではなく、政治集会や南北フランスの人民を前にしているようにして、われわれが望む改革を語りたいのです。われわれはフェデラリスト的な意思について沈黙していることにはうんざりです。パリの中央集権主義者たちはわれわれが黙っているのをいいことに、(われわれを)分離主義者だなどと非難するのですから。…われわれは県のくびきから、その名称が未だにいたるところに残っている諸州 (*des provinces*) を解放したい。…われわれは自治主義者であり、フェデラリストです。われわれはボルドー、トゥールーズ、モンペリエに最高議会 (*une assemblée souveraine*) を望みます。マルセイユかエクスにひとつ望みます。そしてこれらの議会がわれわれの行政、裁判、小学校、大学、公共事業を支配するのです。…(中略)…われわれはこれらの希望を唱えた最初の者ではありません。ミストラルの諸著作は、この思想に満ちております」⁷¹⁾と演説は締めくくられる。

その主張は「長期にわたって要求されてきた言語に対する権利は政治的自治に由来する」⁷²⁾と要約される。モーラスやアムレットティは「フェデラリズム」を引き合いに出すことで、政治の場に活動を移すことをもくろんだのである。

モーラスらは、各コミュニティの間で、「歴史的、経済的、自然的」条件に従って繋がりを持つ自由を要求している。ここから「県の廃止」、「州」および「州議会」の復活要求が出てくるのである。

大革命によりアンシャン・レジームにもとづく「州」は廃止され、それにかわって「県」が設置されたが、この措置により「州」は分断され、地方行政はパリから任命される「県知事」がこれを施すというものであった。つまり、この地方行政システムは「歴史的、経済的、自然的」条件を無視したものであり、中央集権体制を支える骨子であった。したがって「県の廃止」および「州」と「地方議会」の復活の建議は、安定化しつつある第三共和制の根幹を脅かすものと言っても過言ではなかった。

すなわち、この「フェデラリズム宣言」は「フェリブリージュ」の非政治化を推進した二人の歴代カプリエへの挑戦状であったということができよう。しかし、モーラスやアムレットティ

のミストラル、グラへの敬愛の念は変わらないものであった。ミストラルは1892年3月7日に、この「フェデラリズム宣言」を自らの発案で発刊された新聞『アイオリ』紙の第一面に掲載している⁷³⁾。このことは、ミストラルが「フェデラリズム宣言」を是認していたことをあらわすものと考えられる。

以上のことから、モーラスらの「フェデラリズム宣言」を、ミストラルやドゥ・リカールのそれと全く相反するものとして位置付けることは、いささか単純な解釈と言わざるを得ない。しかし、モーラスらはその後、自分たちの「フェデラリズム」と「フェリブリージュ・ルージュ」のそれとの違いを鮮明に打ち出していこうとする。それは具体的には、ブルードン批判という形をとって現われてくる。1898年、モーラスはブルードンの「フェデラリズム」を、究極的には「個人の意思」という「抽象的」なものに基づく、「意志のフェデラリズム *fédéralisme des volontés*」であるとして非難するのである⁷⁴⁾。

だが、ブルードンの「フェデラリズム」を、果たして、モーラスの考えるように「個人の意思に基いた抽象的な」システムと結論付けることができるであろうか。

ブルードンの「契約論」においては、「個人」が「契約」の当事者として位置づけられている。それは「家族の長」のことであり、「家族」という集団を代表した存在である。また「契約」の当事者として、「コミュニオン」、「カントン」、「地方」などがあげられているが、これとても歴史的な背景と伝統に裏打ちされたものであることは既に述べた。その点から考えると、モーラスもブルードンも政治的立場の違いこそあれ、その「フェデラリズム」の中身は非常に似通ったものであるように思われるのである。ここで少なくとも言えることは、モーラスはブルードンを批判的に検証することで自らの「フェデラリズム」を旗幟鮮明にしようとしたことである。

さらに、1892年6月にプロヴァンスのレ・ボーでの聖エステル祭において、「宣言」署名者の一人マリウス・アンドレが同じ趣旨の演説を再度行っている。こうした動きに「フェデラリズム」に反対する共和主義者らが激しく反発することになる。彼らはフェデラリストらのみならず、かれらを野放しにするミストラルやグラらにも攻撃の矛先を向けたのである⁷⁵⁾。

結局、モーラスとアムレッティはジャコバン的共和主義の立場に立つフェリーブルたちによって、「フェリブリージュ」のパリ支部である「パリ・フェリーブル協会 *la Société des Félibres de Paris*」から除名されることになる。そこで、かれらは自ら「パリ・フェリブレンコ協会 *la Soucietat Felibrenco de Paris*」という組織を1893年に設立する⁷⁶⁾。このような分裂の危機に直面して、グラは『良きフェリーブルの公教要理 *Catéchisme du Bon Félibre*』なる論文を発表し、「『フェリブリージュ』は大海原と海岸の沼を決して取り違えたりしない⁷⁷⁾」と述べて、フェデラリストとは一線を画することを改めて闡明にしたのである。

ここで、改めて「フェリブリージュ」の「政治」にかかわる信条の布置を、これまで述べてきたところを踏まえてもう一度整理してみたい。それは、「政治的」か「非政治的」かという

ベクトルによる位置づけである。フェリーブルらの政治信条に注目してみると、その内容は非常に多様である。「フェリブリージュ」設立当初から、フランス革命を肯定的に受容するか否定的に捉えるかという問題に関しても、反動的なルーマニユから積極的に評価するオーバネルのあいだで、さまざまなグラデーションが存在していた。事実、この二人は政治信条の違いから最後には敵対し、オーバネルは「フェリブリージュ」の運動から離脱するのである。したがって、ミストラルらは、個人の政治信条は不問に付すことで、「オック語復興」という目的に大同団結することを優先事項としたのである。しかし、「オック語復興」はけっして非政治性に徹しうような性格のものではなかった。大革命以来、パリを中心とした中央集権的政府にとって、いわゆる「フランス語の優位」と、これを脅かさないといい条件を前提としない限り、「オック語の復興」という問題は取り上げる余地のないものであった。

オック語による文芸復興の最大の成果であるミストラルの『ミレイユ』の評価も、最初はパリのサロンで、ラマルティエヌらパリの文壇人の賞賛を勝ち得たことによるものであった⁷⁸⁾。その意味においては、オック語復興は南仏においてではなくパリにおいてその最初の成果を獲得したと見ることもできよう。パリ文壇は、近代の文明の発展によって失われた「古き良き習俗」、都会では失われた人情を見出す対象として『ミレイユ』を評価した。非政治的な文芸活動とは、そのような「フランス」側のニーズにこたえる運動形態であったと言っても過言ではなかった。そして、パリを中心とした中央集権的構造を受け入れている限りオック語の復興は難しいと考えるフェリーブルたちが、どんなに「フェリブリージュ」内で少数派であろうとも自分たちの要求を闡明にしていたのである。そこには、政治信条における左右の違いは明確に見出すことはできない。右派王党派が非政治的で好古趣味で共和主義者が政治とオック語復興を結びつけるというわけでもない。たしかに「フェリブリージュ・ルージュ」は、社会主義に近いドゥ・リカールやフーレスを中心とした、急進的な共和主義者の集まりであるが、共和主義者の多くは第三共和政の定着とともに、第三代カプリエのグラのように政治に距離を取ろうとする姿勢を見せるようになる。また一方で、アンシャン・レジーム体制の復活という政治的要求を前面に掲げるモーラスのようなフェリーブルも存在していた。このように政治的課題にコミットする姿勢について、フェリーブルたちの間にはかなりの温度差が見られる。とくに、非政治性を掲げる場合でさえ、そのこと自体が非常に政治的な判断に基いたものであったことを再度確認しておく必要がある。

以上が「政治的」か「非政治的」という判断基準による政治的信条の分類である。そして、前者の志向を強く持つ人々の政治信条は、さらに二つのベクトルによって分類される。第一に、自らのアイデンティティを「フランス」に置か、または「オクシタニー」に置か。第二に、「共和主義」を志向するか、または「王政復古主義」のいずれを志向するのか。これらのベクトルの組み合わせによってフェリーブルらの政治への関り方を見てみよう。

第一に共和主義を支持し、自らのアイデンティティを「フランス」に置くグループである。彼らはしばしば「中央集権」を容認する。典型的な例としてはオーバネルをあげることができよう。しかし「オック語」の復興を妨げているのが、パリの中央政府、とりわけフランス語への単一言語政策を推進しようとする第三共和政の政府である。この立場をとるのはパリに居を構える南仏人（*méridional*）の知識人に多かった。彼らの拠り所となったのが「パリ・フェリブール協会」であった。

しかし、パリによって自分たちにかかわる政策が言語を含めて決定され、施行を強制されることは、南仏「オクシタニー」に根を下ろした人々に反感を抱かせるものであった。彼らは「フランス」の「中央集権」に強く反対する。ここに共和主義を支持するものの、自らのアイデンティティを「フランス」よりもむしろ「オクシタニー」に置く第二のグループが誕生する。これが「フェリブリージュ・ルージュ」たちである。

もとより彼らも「フランス」とのつながりを全く否定しようとしているわけではない。パリへの従属関係を清算することに重点が置かれていたのである。そこにはまだ「共和主義」への信頼が存在していた。そこでドゥ・リカールらが構想したのが「フェデラリズム」ということになる。しかしながら第三共和政が成立当初の危機を脱し、政権として安定してくるにつれて、「共和主義」と「フェデラリズム」構想の蜜月は破綻をきたすようになる。なぜならば、「フランス」は第三共和政のもとで「^{いつ}にして不可分」の国民国家建設に邁進していくことになるからである。そこではいささかでも分離主義的な臭いのする思想は危険視された。「共和主義」はフランス革命以来その中央集権的傾向を示してきたが、ここに至ってその特徴が一段と鮮明になってきた。ドゥ・リカールらが展望した「共和主義」と「フェデラリズム」を融合させるという構想も次第に後退していったのである⁷⁹⁾。

こうして、「共和主義」によっては、「オクシタニー」の「フランス」への従属もオック語の衰退も解決できないと考える第三のグループが登場する。モーラスやアムレットら「フェデラリズム宣言」に参加した者たちである。しかしながら、彼らは「フェデラリズム」を実現するためには、「共和主義」よりも「王政」のほうが本質的に適格的であると判断したわけではない。彼らが望む「州」や高等法院の復活という政策を「共和主義」のもとで実現できるのであれば、彼らはあえて「王政」の復活は望まなかった。のちに「アクション・フランセーズ」の指導者として活躍するモーラスではあるが、当初は「共和主義」に共感し、「王政」には懐疑的な態度をとっていた⁸⁰⁾。しかし、第三共和政という形で「共和主義」が具体化されると、モーラスが考えるような「プロヴァンス」の独自性を守ることのできるような体制とは異なり、極めて中央集権的なそれであったことに大いに失望したのである。モーラスの「王政主義」の選択はそのような事情を背景として選択されたものと言えよう⁸¹⁾。

モーラスの政治的立場の変遷はミストラルのそれと重なってくるように思われる。しかしな

がらミストラルと異なる点は、現実の社会に対するかかわり方にあった。その違いとは、ミストラルが、あくまでもオック語の復興に活動を集中させ現実の政治からは距離を取ろうとしているのに対し、モーラスは現実の政治に積極的にかかわっていかうとする点にある⁸²⁾。

モーラスの「フェデラリズム宣言」もまた、ドゥ・リカールの『ラウセタ』の活動と同様に「フェリブリージュ」主流派の賛同を得ることができなかった。そしてグラを中心とする「フェリブリージュ」主流派が「非政治性」を打ち出すという構図がここでも確認されるのである。では「フェデラリズム」の理念はどのようにして次世代へと継承されていったのであろうか。

第4章 ドゥヴォリュイによる組織改革

ここまでの考察で、ミストラルからドゥ・リカールを経て、モーラスへと「フェデラリズム」の理念がどのように継承されていったのか、そして、「フェリブリージュ」主流派がこれに対してどのように反応したかについて明らかになった。次は「フェデラリズム宣言」以後の「フェリブリージュ」において、「フェデラリズム」の理念がどのように継承されていったのかを考察したい。

1901年にフェリックス・グラが急死し、急ぎ後継カプリエを選出しなければならない事態となった。そこでミストラルによりコンシストワールが招集され、カプリエの選挙が実施されることとなった。候補者は以下のとおりである。「フェリブリージュ」創立メンバーの一人タヴァン、そしてミストラルの腹心であり、ラテン思想及び「フェデラリズム」の最も熱心な推進者であるベルリュック・ペルシ Léon de Berluc-Pérussis、他にガストン・ジュールダヌ Gaston Jourdanne、アルベール・アルナヴィエル Albert Arnavielle、そしてピエール・ドゥヴォリュイ Pierre Devoluyであった。最終的には、タヴァン、アルナヴィエルとドゥヴォリュイの三者の決選投票となり、結果としてピエール・ドゥヴォリュイが第四代カプリエとなったのである⁸³⁾。ドゥヴォリュイのカプリエ就任は「フェリブリージュ」にとってどのような意味を持つものであったのだろうか。

20世紀初頭の「フェリブリージュ」の活動は「祭典、宴会、共和派の名士やプロヴァンスの貴族らの出席するさまざまな式典に取って代わられた」、「行動不能」とさえ言える様相を呈していた⁸⁴⁾。しかしながら一方で、リムーザン、ラングドック、ガスコニューなどプロヴァンス以外の「オクシタニー」地域においては、「フェリブリージュ」の末端組織「エスコロ」が19世紀後半に次々と設立されていた⁸⁵⁾。各エスコロは『年報 almanach』という形式のオック語の文書を出版することで、末端のフェリーブルらのオック語の学習の便宜を図った⁸⁶⁾。彼らにとっては学校の外で読み書きを学び完成させる機会であった。このことは、従来の知的エリート中心の活動から、より大衆レベルにまで活動の裾野が広がったことを意味していた。ミスト

ラルはこのような新たな胎動を感じ取り、変化への期待を、次代をになうカプリエに託したのであった。また、ドゥヴォリユイが共和主義を支持しつつも「フェデラリスト」であったこと、そしてプロヴァンスの出身であったことも、ミストラルによって、カプリエとして適任と判断されたのであった⁸⁷⁾。

では、ドゥヴォリユイの「フェデラリズム」とはどのようなものだったのだろうか。ドゥヴォリユイの「フェデラリズム」の特徴は、その根底にある歴史観にある。それは、これまで見てきた「フェデラリスト」のそれとは以下の点で特異なものであった。それは「ガリア」の一体性なる主張である。すなわち「フランス」は相次ぐ併合によって形成されたのに対し、「ガリア」はそれ以前にすでに存在していたのだとする見方である。そこから彼独特の「フェデラリズム」が導き出されてくる。ドゥヴォリユイは、「ガリア」は複数の「民族」から成る一体の領域であり、「オクシタニー」も「ガリア」の一部を構成していると考えるのである。つまり、「フランス」は「オクシタニー」を併合して成立したと考えれば「オクシタニー」の分離という考え方が出てきてしまう。しかし、「オクシタニー」はそもそも「ガリア」の一部であり、「ガリア」は複数の民族から構成されていたと考えることで、フランスからの分離独立を考える必要はなくなるのである。このことは同時に「オクシタニー」と他の「民族」との「連合」にもチャンネルを開く可能性を持つものであった。これがドゥヴォリユイの「フェデラリズム」の特徴であった⁸⁸⁾。

ドゥヴォリユイの思想及び行動は「ドゥヴォリユイスム」と称される。1901年にポーで開催された聖エステル祭の演説において、ドゥヴォリユイは南仏の歴史の重要性や言語の復興、詩の優位などについて語った。とくに注目すべき点は、「社会行動」への言及であった。前述したように「社会への働きかけ」というベクトルを失いつつあった「フェリブリージュ」に、ドゥヴォリユイは新風を吹き込もうとする意欲を見せたのであった。ドゥヴォリユイの改革は、まず、「フェリブリージュ」内の組織改革において具体化された。それが、プロヴァンス、ラングドック、アキテーヌ、カタルーニャに設置されていた「マントゥナンス」の廃止である。彼の狙いは「フェリブリージュ」の末端組織である「エスコロ」の自立性を高めることと、「コンシストワール」への「マントゥナンス」の影響力を排除することであった。「マントゥナンス」はその領域内に新設される「エスコロ」に認可を与える権限を有しており、ドゥヴォリユイはこの点に「フェリブリージュ」の組織拡大を阻害する最大の原因があると考えたのである。また「マントゥナンス」の代表者「サンディック syndic」は「コンシストワール」の事務局の構成員であり、この点で、「コンシストワール」そのものの独立性が脅かされると考えたのであった。ドゥヴォリユイは1905年の規約改正で「マントゥナンス」廃止を実行すると、「フェリブリージュ」内部でその賛否をめぐって、組織を二分する状況に陥ったのである⁸⁹⁾。

では、こうした改革によって、その当初の目的どおり「フェリブリージュ」の運動規模は拡

大したのであろうか。結果的に言えば、彼の改革にはやはり限界があったと言わざるを得ない。その限界とは何であったのか。「マントゥナンス」は廃止されたが、同年「プロヴァンス友の会 La freirié provençalo」という名称の、実質的にはプロヴァンスの「マントゥナンス」に相当する組織が、ジャン・モネ Jean Monné によって設立されていたのである。改革の限界とは、この「プロヴァンスの優位」を崩せない点にあったと考えられる。「プロヴァンスの優位」とはどういうことであろうか。ドゥヴォリュイのカプリエ就任の条件として、彼がプロヴァンス人であることをミストラルがあげたことは前述した。また1905年の聖エステル祭の演説で、ドゥヴォリュイは「アルル方言」を「最も進化したもの、すなわちオック語のなかでも最も近代的なもの」として提示したりもした。これは後述する正字法の問題にも絡んでくる。ミストラルもドゥヴォリュイも、「プロヴァンス」の至上性を克服する必要性を感じていたことは確かであるが、それでも本質的に「プロヴァンス」を基準とする姿勢は保持されたままであったと言ってよい。ドゥヴォリュイの改革は、社会行動への参加を期待されていたにもかかわらず、実際には実質的な成果をあげることはなかった。そのことを示すのが、1907年のブドウ栽培業者のデモ活動への対応である。ミストラルはこのデモへの参加を拒否したのである(注82参照)。ドゥヴォリュイもミストラルに同調して、「フェリブリージュ」という組織全体として、運動に参加することを拒否したのである⁹⁰。

他方で、ドゥヴォリュイの改革に反対する勢力はドゥ・ヴィルヌーヴ・エスクラポン Christian de Villeneuve-Esclapon を中心としてドゥヴォリュイのカプリエ職解任に向けて動くことになる。

ドゥ・ヴィルヌーヴ・エスクラポン伯爵は1852年、エクス・アン・プロヴァンスの由緒ある家系に生まれた。政治的には王党派で、スペインのカルリスタ戦争にドン・カルロスの参謀付き武官として参加し、1889年から93年にかけてはコルシカからブーランジェ派の代議士となった経歴の持ち主である。ドゥ・ヴィルヌーヴはミストラルやボナパルト・ワイズら「フェリブリージュ」創設期の立役者たちと早くから親交を結んでおり、1892年の「フェデラリズム宣言」には賛同の署名もおこなっている。その理由はバルソッティによれば、「共和制の独裁形態 (type césariste) の中央集権化」⁹¹に反対するからであり、ドゥ・ヴィルヌーヴの望んだものは「オック語への敬意とフランス語と同等の教育、オクシタンの民衆の風俗伝統の維持にとどまらず、フェデラリズムの教義から着想を得た政府の政治形態によって保障された『自治 *autonomie*』」⁹²であった。では、ドゥ・ヴィルヌーヴの「自治 *autonomie*」の根本にある「フェデラリズム」とはどのようなものであろうか。

ドゥ・ヴィルヌーヴの政治思想は歴史的な分析をもとにしている。すなわちすべての民族は「フェデラリズム」から「ユニタリズム」へと移行し、再び「フェデラリズム」へと回帰するとしている。そして「フェデラリズム」の行き着く先は無政府状態であり、「ユニタリズム」

のそれは専制であるという。彼によれば10世紀から12世紀中ごろまで無政府状態にあり、12世紀中ごろからフランソワ一世の治世までは両者の均衡する時期、そして以後は「ユニタリズム」へ向かって大きく傾いていき、ルイ14世およびナポレオン1世の治世が「ユニタリズム」の頂点となる。第三共和政はその延長でありドゥ・ヴィルヌーヴにとって断じて認められるものではなかったのである。では、ドゥ・ヴィルヌーヴはなぜ「ユニタリズム」に反対するのか。

ドゥ・ヴィルヌーヴにとって社会の構成単位の筆頭にくるのは「個人」であった。「家族」は「個人」のために、「コミューン」は「家族」のために、「州」は「コミューン」のために、「国家」は「州」のために存在する。「家族」、「コミューン」、「州」、「国家」は「個人」に対し、その自由、生命、財産を保障し、暴力から守ることを目的としている。このような社会のありようこそドゥ・ヴィルヌーヴの構想する「フェデラリズム」の中身であった。このような思想をもつドゥ・ヴィルヌーヴにとって「ユニタリズム」を体現する第三共和政は認められるものではなかった。

ドゥ・ヴィルヌーヴは、この「ユニタリズム」を推進する勢力が「フリーメーソン」であると考えていた。彼によれば、「フリーメーソン」はフランスの王政を絶対主義へと導き、さらに大革命の成果を我がものとしたのである。そして「フリーメーソン」は「フェリブリージュ」へも入り込み、「フェデラリズム」に好意的な傾向を変えようとしていると考えたのである。ドゥヴォリュイのカプリエ職就任もこの流れで理解しようとする⁹³⁾。

ドゥヴォリュイ解任運動にかかわって、「フェデラリズム」と密接なかわりを持つもう一つの思想的流れが「地域主義」である。「地域主義」を提唱したのは「フェリブリージュ」のマジョラルでもあったジャン・シャルル・ブランである。彼の思想に最も大きな影響を与えたのは前述のルイ・クサヴィエ・ドゥ・リカールであった。しかし一方、シャルル・ブランはパリに赴いてはモーラスとアムレットィらの「パリ・フェリブレンコ協会」の活動に積極的に参加している。そして、1901年に「フランス地域主義連盟 la Fédération Régionaliste Française (FRF)」を設立した。FRFの目指すところとは、第一にフランスの過剰な中央集権に反対し中央集権主義者やジャコバン主義者らを駆逐すること、第二に、「フランス」の統一的枠組みはあくまでも維持して分離主義者を排除することである⁹⁴⁾。第二の目的からすれば、ドゥヴォリュイの目指すところと一致しうるのである。しかし、ドゥヴォリュイはこの「地域主義」に反対の立場をとった。1901年にトゥールーズで開催された「地域主義会議」の直後には地域主義者らを野次馬扱いしたりしている⁹⁵⁾。

こうしてドゥヴォリュイのカプリエ職在任は、ドゥ・ヴィルヌーヴ・エストラポンのような個人やFRFのような組織による反対を受けることになるのである。また1907年から1914年にかけて「アクション・フランセーズ」は「フェリブリージュ」のなかに深く入り込み、反ドゥヴォリュイの立場を鮮明に示すようになる⁹⁶⁾。

反ドウヴォリュエイの原因として、カラメルとジャヴェルは、プロテスタントで共和主義のドウヴォリュエイに反発するカトリックで王党派のドウ・ヴィルヌーヴ、という図式を描くアルベル・ティボーデの説明を取り上げ、彼らの宗教的な対立感情に注目している⁹⁷⁾。しかし、それでは共和主義者で反教権主義（反カトリック）のエスチウ Prosper Estieu、ペルボスク Antonin Perbosc、ドウ・リカールらが反ドウヴォリュエイの陣営に組している点を説明できない。そこで、反ドウヴォリュエイの原因としてアブラートが三つの点をあげて説明している点を参考にして考察してみる⁹⁸⁾。第一に、プロヴァンスを基準にする姿勢を実質的に改善しようとしないうドウヴォリュエイに対する反感を指摘できよう。第二に、1905年の規約改正による「マントゥナンス」廃止の断行であった。この行為は自分に対する批判を封殺する独裁的なカプリエというドウヴォリュエイのイメージを作り上げることに貢献した。1906年には「オクシタン連合 la Fédération Occitane」が設立され、ドウヴォリュエイに強硬に反対するフェリブールらが参加した。前記のエスチウ、ペルボスク、ドウ・リカールもこれに参加している。そして、第三に正字法をめぐる言語学上の対立である⁹⁹⁾。

では、ドウヴォリュエイは「フェリブリージュ」のなかで孤立してしまったであろうか。「フェリブリージュ」内におけるドウヴォリュエイの立場は、「コンシストワール」においてはしばしば、マジョラルたちと対立したが、「総会」においては、新設の「エスコロ」を自陣営に取り込むことにより、多数派を形成することができた。実際、「コンシストワール」のなかの勢力分布を見ると、1902年から1908年にかけて、ドウヴォリュエイ支持派のマジョラルが順次選出されている¹⁰⁰⁾。ただ、それでも反ドウヴォリュエイのマジョラルらの勢力を弱めることは困難であった。ドウヴォリュエイのカプリエ職在任は、「フェリブリージュ」内におけるさまざまなレベルにおいて微妙なバランスをとることで可能であったと言えよう。

1908年9月から10月にかけて、ドウ・ヴィルヌーヴ・エスクラポンは南仏の「エスコロ」を歴訪し、ドウヴォリュエイによって改正された規約を再改正する必要性を呼び掛けた。トゥールーズでは、1906年に「オクシタン連合 la Fédération Occitane」が設立され、反ドウヴォリュエイの気運が醸成されていたことは前述した。この組織のメンバーは大部分が共和主義者であり、カトリック王党派のドウ・ヴィルヌーヴとは政治的にも宗教的にも水と油の関係にあったように思われる。しかし、ドウ・ヴィルヌーヴは、まずドウザザール・ドウ・モンゲラル Desazars de Montgailhard との関係強化に乗り出した。ドウ・モンゲラルは王党派の地主貴族であり、ドウ・ヴィルヌーヴと境遇が似ていた。そこを突破口にしてドウ・ヴィルヌーヴはエスチウ、ペルボスク、ドウ・リカールら他のマジョラルらを自陣営に引き込み、「コンシストワール」で反ドウヴォリュエイの動きを画策することに成功したのである¹⁰¹⁾。

さらにドウ・ヴィルヌーヴは、ラングドックの「エスコロ・ムンディノ Escola Moundino」の代表アンドレ・スレイユ André Sourreil にも働きかけ、反ドウヴォリュエイの動きに同調さ

せた。スレイユは1901年、「地域主義委員会 Comité Régionaliste」を設立したが、そこではジュールダヌやドゥ・リカールら共和主義者たちとアルナヴィエルやプラヴィエル Armand Praviel、前述のドゥザザールといった王党派も参加しており、反ドゥヴォリュイの旗印のもと、政治信条や宗教信条の違いを越えて一致するという状況が生まれていた¹⁰²⁾。

このような反ドゥヴォリュイのキャンペーンが展開されるなか、1909年5月、ローヌ川右岸のサン・ジル Saint-Gilles で開催された聖エステル祭に合わせて、「コンシストワール」および「総会」も開催された。「コンシストワール」では欠員となっていた4人のマジョラルに関する補充選挙実施が議題となった。この機会を利用してドゥヴォリュイ派も反ドゥヴォリュイ派も自陣営の勢力拡大に乗り出した。結果として反ドゥヴォリュイ派が勝利し、「コンシストワール」は反ドゥヴォリュイ派が優勢となった。この事態を受けて、ドゥヴォリュイが8月に辞職すると、10月に「コンシストワール」が招集され、ヴァレール・ベルナル Valère Bernard が新カプリエに選出された。この一連のプロセスを背後から画策したのもドゥ・ヴィルヌーヴであった¹⁰³⁾。

ヴァレール・ベルナルが1910年に雑誌『エステロ』を発刊すると、ドゥ・ヴィルヌーヴも同年、自ら資金を出し、また編集者として雑誌『オクシタニア』を発刊する。ヴァレール・ベルナルは前任の歴代カプリエらグラ - ドゥヴォリュイの路線を継承して、「政治」に距離をとることを『エステロ』誌上において表明した。他方で、ドゥ・ヴィルヌーヴは、彼らが距離を取ろうとした「フェデラリズム」をめぐる議論を復活させようとするのである。

しかし、ドゥ・ヴィルヌーヴの前に立ちはだかった人物がいた。フィラデルフ・ドゥ・ジェルド Philadelphie de Gerde という女性である。前述の『エステロ』に資金を提供したのは、ガストン・ルキエ Gaston Requier という人物であったが、その妻がフィラデルフ・ドゥ・ジェルドであり、有力なフェリブルであった。王党派である彼女は、同時に「アクション・フランセーズ」の熱烈な支持者でもあった。「フェリブリージュ」と「アクション・フランセーズ」の関係は、彼女を媒介にしてより一層深まっていくのである。このようにして「サン・ジルの危機」以後の体制において、フィラデルフ・ドゥ・ジェルドの「フェリブリージュ」内における位置の重要性が浮かび上がってくる¹⁰⁴⁾。

1910年には、フィラデルフ・ドゥ・ジェルドはマジョラルに立候補するが、ドゥ・ヴィルヌーヴの反対によって結局取り止めることとなった。彼女の立候補の意図は、ドゥヴォリュイ支持派と闘い、新カプリエ支持派を強化し、ドゥ・ヴィルヌーヴの影響力に対抗しようとしたものであった。彼女はマジョラルとなることを断念したとはいえ、翌年にはモンペリエで開催された聖エステル祭において、「フェリブリージュ」を「闘争機関」とし、さらには「政党」とすることを提案している¹⁰⁵⁾。

1911年、規約の再改正が行われた。1905年の規約改正で廃止された「マントゥナンス」が

復活されると同時に「総会」が廃止された。この規約再改正にもドゥ・ヴィルヌーヴは1909年から2年間、調査と討論を重ねて新規約の草案をまとめるなど、積極的にかかわった。結果としてドゥヴォリュイの行った改革は否定されたことになる。こうして「エスコロ」は「マントゥナンス」の下部機関としてではなく、「総会」を通じて直接「フェリブリージュ」と結びつく可能性をはく奪されてしまい、ドゥヴォリュイの改革で「エスコロ」に認められていた財政的な支援も失ってしまう¹⁰⁶⁾。

規約の改正は、翌1912年のモンペリエの聖エステル祭で正式に認められるが、もうひとつの議題がカプリエの選出であった。ヴァレール・ベルナルのカプリエ任期が満了するのにともない、再任するのか、それとも新カプリエを選出するのが問題となった。ドゥ・ヴィルヌーヴが立候補しようとしていることを知った者たちはこれに反対し、ヴァレール・ベルナルの再選を支持した。フィラデルフ・ドゥ・ジェルドはドゥ・ヴィルヌーヴにもヴァレール・ベルナルにも反対し、1901年のカプリエ選挙の候補者アルナヴィエルを推した。このような状況にあって、マジョラルたちはヴァレール・ベルナルの再選を決めたのである。結果として、フィラデルフ・ドゥ・ジェルドとドゥヴォリュイは「フェリブリージュ」から身を引くことになる。前者は「アクション・フランセーズ」の活動に積極的に参加し、後者は「総会」廃止に抗議して、マジョラルの職をも辞することになる¹⁰⁷⁾。

ドゥヴォリュイの改革は、結局、「フェリブリージュ」内部の党派抗争に終始して終わったような印象を与える。ドゥ・ヴィルヌーヴは、一連の行動から、「毒さそり Verineta d' Escorpion」とあだなされた¹⁰⁸⁾。ただ、ここで注目したいのは、ドゥヴォリュイにせよ、その敵対者ドゥ・ヴィルヌーヴにせよ、「フェデラリズム」の思想を根本に持っていたという点である。しかし、その意味するところは大きく異なっていたように思われる。バルソッティによれば、1914年に第一次世界大戦が勃発すると、ドゥ・ヴィルヌーヴはオクシタン国家のフランスからの分離独立を画策してドイツと接触を試みたりしていたようである¹⁰⁹⁾。ドゥヴォリュイは前述のように、あくまでも「ガリアの一体性」を主張し、「オクシタン国家」の分離独立は考えておらず、目指すべき「オクシタニー」のあり方について根本的に対立している。しかし、それよりも注目すべき点がある。それは、フェリックス・グラ、ピエール・ドゥヴォリュイ、ヴァレール・ベルナルら共和主義を奉じる歴代カプリエが政治活動とは一定の距離を保ち、「フェリブリージュ」の活動をもっぱらオック語の復興にしほることによって「非政治性」を確保しようとしているのに対し、ドゥ・ヴィルヌーヴやフィラデルフ・ドゥ・ジェルドラ王党派に属するフェリブルらが、「フェリブリージュ」の非政治化を批判して、むしろ積極的にこれにかかわっていくことを主張したという点である。挫折したとは言え、ドゥヴォリュイの改革が一時的にせよ断行できたのも、反ドゥヴォリュイ派の攻勢に押されたところがあったのではないか。バルソッティはドゥ・ヴィルヌーヴの役割について、「それ（ドゥ・ヴィルヌーヴが「フェリブリー

ジュ」内でおこなった行動）がなければ、ピエール・ドゥヴォリユイは組織改革に到達できたであろうか。」¹¹⁰⁾と感想を述べている。しかし、その政治へのかかわりには大衆動員という視点が欠けており、その意味においてはエリート的な性格が強いと言えよう。

まとめ

20世紀に入り「フェリブリージュ」の重鎮ミストラルも、そのカリスマ的な影響力を保ちつつも、しだいに表立った活動からは身を引くようになった。ミストラルは1907年のブドウ栽培業者らの大規模なデモ活動への参加を拒否したことは前述した。ドゥヴォリユイもミストラルに倣って、ブドウ栽培業者らの活動に対し「フェリブリージュ」として公式に参加することはなかった。しかし、ミストラルは活動の中心的人物マルスラン・アルベールに故郷マイヤースから「母なる大地よ、そしてそれを揺るがす民よ、万歳！もっと政治を！オック語で団結を！」¹¹¹⁾と電報を送っている。このことからミストラルが決して政治への関心そのものを失ったわけではないことがわかる。

「フェリブリージュ」は、その設立当初からオック語復興という目的を明確にしてきた。その意味では、「フェリブリージュ」運動は文化的な活動であるということ是可以する。しかしそれには理由があった。それは、組織設立の当初からミストラル、オオバネル、ルーマニーユらの政治的信念の対立が、組織そのものの存続を危うくするほどに大きいものであったという点である。さまざまな政治的意見をぶつけあう「フェリーブル」らを取りまとめるには、カリスマ的な求心力を持つとともに政治的な柔軟性を有する人物を中心とする必要があった。その役割を果たしたのがミストラルであった。彼は表立っては非政治性を標榜しながらも、ドゥ・リカールらの「フェリブリージュ・ルージュ」やシャルル・モーラスらの「フェデラリズム宣言」といった、言わば「フェリブリージュ」の分派活動を支援することで、間接的意思表明をしたのである。

では、ミストラルの政治思想とはどのようなものであったのだろうか。それはブルードンの流れを汲む「フェデラリズム」であり、本稿において、その思想的系譜がドゥ・リカールのみならず、ブルードンを批判的に継承したとも言えるモーラス、さらにはピエール・ドゥヴォリユイとその敵対者ドゥ・ヴィルヌーヴ・エスクラポンにまで及んでいる点を確認することができた。

地方の自主性を奪い取るパリの中央集権へのアンチテーゼとして、ミストラルの影響のもと、後継フェリーブルらによって「フェデラリズム」の理念は言説として形を整えていった。しかし、そこには大衆動員という視点が欠けており、第一次世界大戦を契機として世代が若返ると、政治的主張を行動として具体化しようとするフェリーブルらが登場する。次の課題としては、

第一次世界大戦以降の「フェリブリージュ」とその周辺の動向について考察を深めていきたい。

注

- 1) 福留邦浩, 『『オクシタン運動』の再検討に向けて——オック語復興に対するトゥレーヌの考察を中心に』(『立命館国際関係論集』2005年第5号, 43～60ページ)
- 2) 中嶋茂雄, 「南フランスの地域アイデンティティ—オクシタニスムを中心に」, 『現代ヨーロッパの地域問題と地域運動』, 昭和60～62年度科学研究費補助金(総合A)研究成果報告書, 研究者代表宮島喬, 32ページ。
- 3) 彼らは7人であるとされるが, これについては後で触れる。
- 4) Philip Martel, “Le Félibrige : un incertain nationalisme linguistique”, *Langue(s) et nationalisme(s), Mots. Les langages du politique*, 74, Presses de la Fondation nationale des sciences politiques, Paris, mars 2004, [en ligne], mis en ligne le 24 avril 2008. URL : <http://mots.revues.org/index4273.html>. “Qui parle?”
- 5) Calamel/Javel, *La langue d’oc pour étendard — Les félibres(1854—2002)*, Privat, Toulouse, 2002, pp.83-84.
- 6) 「フェリブリージュ」の組織については, Calamel/Javel, *op.cit.*, pp.73-76, pp.83-84, 85. を参照。
なお, 現在(1997年規約)ではコンシストワールは「アカデミー・フランセーズ」のような学術的な性格になり, 最高議決機関はフェリブル全員が参加する「総会 Conseil Général」となっている。
現在の「フェリブリージュ」のパソコンのサイトを開くと, 2007年1月25日現在の新規約(1997年改正)としてエスコロ(エコール)に関する規定が存在する。<http://www.felibrige.org/> (2009-02-13 現在)
第18条によると, どんな組織でも「フェリブリージュ」と目的を同じくするのであれば, 「フェリブリージュ」に加盟できること。そしてその際, その組織は「エスコロ・フェリブレニコ *Escolo Felibrenco* (*Ecole Félibréenne*)」と呼ばれる旨規定されている。さらに第19条においては, エスコロは最低でも7人のフェリブルで構成される旨が規定されている。
- 7) Calamel/Javel, *op.cit.*, pp.106-108.
- 8) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.80-81.
- 9) *Ibid.*, p.96.
- 10) *Ibid.*, p.97. カラメルとジャヴェルは1877年当時で銀行家と企業家は2%, 管理職が4%, 聖職者が10%であるとしている。共和派, 王党派を問わず, 代議士も数名加入しているという。代表例としてはフランス労働党の代議士クローヴィス・ユグ Clovis Hugues (1851-1907) がいる。
- 11) *Ibid.*, p.75.
- 12) Pierre Fabre, *MISTRAL EN HERITAGE*, Editions Autre Temps, 2002, p.133.
- 13) *Ibid.*, pp.48-49.
- 14) *Ibid.*, pp.61-62.
- 15) <Correspondance Mistral-Roumanille>, Bibliothèque municipale d’Avignon, ms.6042.
Philippe Martel, “Bleu, blanc, ou rouge: la politique félibréenne autour de 1870”, *AMIRAS* n.13, 1986, p.117.
- 16) Emile Ripert, *Le Félibrige*, Edition Jeanne Laffite, Marseille, 2004, p.102.

- 17) Laurent Abrate, *1900/1968 OCCITANIE des idées et des hommes*, IEO, 2001, p.77.
- 18) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.52.
1854年5月の会合の場にブリュネとマチユは参加していなかったが、ミストラルが後年「フェリブリージュ」結成を語る際に加えたものらしい。
- 19) *Ibid.*, pp.63-64.
- 20) Emile Ripert, *op.cit.*, p.77.
- 21) *Ibid.*, pp.80-82.
- 22) 他に Antoine-Braise Crousillat, Eugène Garcin, Adolphe Dumas, Louis Roumieux, Castil Braze などがいる。Emile Ripert, *Le Félibrige, op.cit.*, pp.82-91。
「フェリブリージュ」創設のメンバーとしてミストラルを含め、ルーマニユ、オーバネル、ジエラ、ブリュネ、マチユ、タヴァンの7人が選ばれた経緯に関しては稿を改めて検討する必要がある。マチユ、タヴァン両名は「フェリブリージュ」創設の会合に欠席していたにもかかわらず、なぜ後になってミストラルによって創立メンバーに数えられるようになったのか、前述リパールが挙げている人物たちがそこからはずされたのはなぜなのか、そこにはミストラルの何らかの思惑が潜んでいるように思われる。
- 23) タヴァンは「フェリブリージュ」結成後、兵役に従事したが、その後病を得て農業も詩作も放棄せざるを得なかった。
- 24) アンリ・ジオルダン編（原聖訳）、『虐げられた言語の復権』、1987年、10-11ページ。
- 25) Abrate, *op.cit.*, p.75.
- 26) *Ibid.*, pp.75-87.
- 27) 千葉真、「連邦主義」、『政治概念の歴史的展開』第一巻、古賀敬太編著、晃洋書房、2004年、241ページ。
- 28) 同上、251ページ。
- 29) 同上、252ページ。
- 30) 同上、253ページ。
- 31) 同上、254ページ。
- 32) カール・シュミット（阿部照哉・村上義弘訳）、『憲法論』、みすず書房、1989年、418 - 419ページ。
- 33) 千葉真、同上、254ページ。
- 34) 同上、255 - 256ページ。
- 35) 瓜生洋一、「国民の祝日『七月一四日 le 14 juillet』の成立 - 国家神話の誕生とナショナリズム -」、『大東法学』30号、1998年、171-193ページ。174ページ。
- 36) 同上、176ページ。
- 37) このことに関連して、フランス地方自治研究の第一人者アンドレ・ルー氏が2005年8月23日に東京において、笹川日仏財団主催により「フランスの地方自治の今」と題する講演を行った際、聴衆からの質問に答える形で、「フランスには連邦主義は存在しない。フランス革命時に数ヶ月間主張されたが、その主張者はギロチンにかけられた。」と発言していることが、講演会に参加した務台俊介氏のブログ「目黒川の畔にて」の同日付けの記事中で紹介されている。http://tokyo-nagano.txt-nifty.com/smutai/2005/08/post_3f65.html
- 38) *Ibid.*, p.84.
- 39) *Ibid.*, p.77.

- 40) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.141. 「フェリブリージュ」へのブルードンの影響については Philippe Martel, "Félibres rouges ou rouges félibres", *Per Robert Lafont, estudis oferts a Robert Lafont par ses collègues e amics*. Ed.C.R.I.O. de Provinja, Nîmes, 1990, p.214. を参照。
- 41) Proudhon, Du principe fédérarisme, Œuvres Complètes, Nouvelle Édition sous la direction de C. Bouglè et H.Moysset, SLATKINE, Genève-Paris, 1982, p.369.
- 42) Abrate, *op.cit.*, p.77.
- 43) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.143.
- 44) 『ラウセタ年報』については, Abrate, *op.cit.*, pp.79-81. を参照。雑誌名はオック語で「ひばり alouette」を意味し, プロヴァンス方言ではなくラングドック方言で編集された。活動開始は1876年だが, 創刊号が出たのは1877年である。全部で4号出ており, 第2号は1878年, 第3号は1879年, 最終号は1885年に出ている。
「フェリブリージュ・ルーージュ」については, Jean Sagne, *LE MIDI ROUGE MYTHE ET REALITE ETUDE D'HISTOIRE OCCITANE*, éditions anthropos, 1982, p.74. を参照。
- 45) Guiraud, *op.cit.*, pp.19-20.
- 46) *Ibid.*, pp.79-81.
- 47) Jean Sagne, *op.cit.*, pp.76-77.
- 48) Calamel/Javel, *op.cit.*, pp.141-142.
- 49) 谷川稔・渡辺和行編, 『近代フランスの歴史』, ミネルヴァ書房, 2006年, 152ページ。
- 50) Philippe Martel, *op.cit.*, p.215.
- 51) 西川長夫, 『フランスの解体? もうひとつの国民国家論』, 人文書院, 1999年, 185 - 188ページ。
- 52) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.142.
- 53) ドゥ・リカールは自らの死に臨んで, いったん埋葬した死体を掘り返し, 再び立ったまま太陽と向かい合うように埋葬するよう友人に遺言したという。これは「カタリ派」の教義に基くものだという。
Lavelle, *op.cit.*, p.425.
- 54) Abrate, *op.cit.*, p.82.
- 55) ドゥ・リカールは著書『改革の政治精神』(1893)のなかで次のように述べている。「私は言葉の人類学的な意味で一つの人種に属しているのではなく, 心理学的, 歴史的な人種に属していると強く感じている」と。Calamel/Javel, *op.cit.*, p.142.
- 56) ドゥ・リカールは「『自由なフランス』のなかの『自由なラングドック』」を求めた。Jean Sagne, *op.cit.* p.74.
- 57) Proudhon, *op.cit.* pp.313-323.
- 58) Julian Wright, *THE REGIONALIST MOVEMENT IN FRANCE 1890-1914 JEAN CHARLES-BRUN AND FRENCH POLITICAL THOUGHT*, Oxford, Clarendon Press, p.92.
- 59) Proudhon, *op.cit.*, p.319.
ここでの「個人」とはブルードンによれば「家族の長」のことであり, 「家族の長」でない者は権利主体として考慮されていない点に注意したい。
- 60) *Ibid.*, p.546.
- 61) Calamel/Javel, *op.cit.*, pp.144-145.
- 62) Philippe Martel, *op.cit.*, pp.214-215.
- 63) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.144.

- 64) *Ibid.*, p.145.
- 65) Abrate, *op.cit.*, p.81.
- 66) 演説文を書いたのはモーラスとアムレッティであるが、演説はアムレッティがおこなった。演説は自分たちが「フェデラリスト」であることをはっきりと宣言しており、フランス革命で廃止された「州」の復活を提案し、州議会の設置を提案している。
- 67) シャルル・モーラス（1868-1952）はプロヴァンスのマルティーグ Martigues の生まれである。1885年パリに移り、1888年オーパネル論を書いてパリ・フェリーブル協会に認められ、フェリブリージュに入会した。ロレーヌ出身の作家モーリス・バレスの思想的影響を強く受けて、ブーランジェを支持した。以後、ドレフュス事件では反ドレフュス派の急先鋒としてジャーナリズムで活躍する。この事件を通じて、彼は個人の「人権」や「真実」よりも「国家の名誉」を重視する姿勢を鮮明にし、次第に共和政から王政を支持するようになる。1899年には「アクション・フランセーズ」に加入する。同年から1902年にかけて王政を支持するキャンペーンを展開した。第二次世界大戦ではヴィシー政権を支持し、戦後戦犯として終身禁固刑に処され、獄中で病死した。Yves Chiron, *La vie de MAURRAS*, Editions Godefroy de Bouillon, Paris, 1999, pp.72-74, 78-81,145-155,158-161,167-193, 418,449.
- 68) Philippe Martel, *op.cit.*, p.217.
- 69) 共和主義者で「宣言」に署名した者は他に Auguste Marin, Pierre Bertas, Jules Ronjat などがいる。Abrate, *op.cit.*, p.85.
- 70) 金子明日香, 「オクシタニーとは何か―ド・ゴール体制からミッテラン政権下における南フランス地域主義運動家らの考察―」（『地域研究』, 20, 筑波大学, 2002年, 65 - 79ページ, 67ページ）。
- 71) Chiron, *op.cit.*, pp.103-104.
- 72) Abrate, *op.cit.*, p.84.
- 73) *Ibid.*, p.85.
- 74) Julian Wright, *op.cit.*, p.80.
- 75) Abrate, *op.cit.*, p.86.
- 76) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.152.
- 77) Abrate, *op.cit.*, p.86.
- 78) Ripert, *op.cit.* p.104.
- 79) Abrate, *op.cit.*, p.82.
- 80) *Ibid.*, p.85.
- 81) P・ラヴァルはモーラスのナショナリズムの理論をモーリス・バレスのそれと比較し、後者のそれが「ethnique」なのに対し、前者は「étatique」なもので、王政を選択するのも「忠実」からではなく、「省察」の結果なのだとしている。
- 82) ミストラルは、1907年、南仏のブドウ栽培業者たちが起こしたデモに参加を求められたにもかかわらず、同じ日に開催された「フェリブリージュ」の聖エステル祭への出席を理由に、デモへの参加を断っている。この事例がその後の「フェリブリージュ」の性格を大きく決定づけることとなった。
- 83) Abrate, *op.cit.*, pp.87-88.
- 84) *Ibid.*, p.87.
- 85) Calamel/Javel, *op.cit.* pp.119-124.
- 86) Dominique Blanc, «Lecture, écriture et identité locale. Les almanachs "patois" en pays d'oc (1870-1940)», *Terrain*, n° 5, 1985, pp.16-28.

- 87) Abrate, *op.cit.*, p.87.
- 88) *Ibid.*, pp.89-90.
- 89) Calamel/Javel, *op.cit.*, pp.155-156.
Abrate, *op.cit.*, pp.96-97.
- 90) *Ibid.*, pp.155-159.
- 91) 南仏の地域日刊紙『ラ・マルセイエーズ』に1990年11月18日から連載開始されたグラウディ・バルソッティのオック語にかかわる人々についてのコラム参照。現在、バルソッティによってネット公開されている。
Glaudi Barsotti, <http://www.amesclum.net/JBiblioteca.html> "Mémoire du Pays"<lettre V>, pp.10-11.
- 92) Abrate, *op.cit.*, pp.92-93.
- 93) *Ibid.*, pp.93-94.
- 94) Julian Wright, *op.cit.*, pp.43-76.
- 95) Abrate, *op.cit.*, p.95.
- 96) *Ibid.*, p.96.
- 97) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.161.
- 98) Abrate, *op.cit.*, p.120.
- 99) プロヴァンスで使用され、発音と綴りが比較的一致している、いわゆるミストラル方式とプロヴァンス以外のオック語地域（特にラングドック）で使用され、また中世のトゥルバドゥールの作品で使用されている、いわゆる「古典的正字法」の対立である。後者の正字法の基礎をつくったのがラングドックのエステウ、ペルボスクらであり、ドゥヴォリユイは前者の正字法を採用することを主張した。
- 100) Abrate, *op.cit.*, p.121.
- 101) *Ibid.*, p.122.
- 102) *Ibid.*, p.123. 「エスコロ・ムンディノ」はラングドックで最古の「エスコロ」であり、フェリーブルの質、人数ともに最も重要であるにもかかわらず、「コンシストワール」に代表を送ることもできない状態にあったという。一方、プロヴァンスの「エスコロ・デ・ラール *Escolo de Lar*」は4人のマジョラルを出していた。このような状況にプロヴァンス以外の地域のフェリーブルたちは反発を感じていたのである。
- 103) *Ibid.*, pp.124-127. Calamel/Javel, *op.cit.* pp.159-162. 「コンシストワール」出席のマジョラルのうち、ドゥヴォリユイ派と反ドゥヴォリユイ派の勢力は、人数の上では反ドゥヴォリユイ派が優勢であった。そこでドゥヴォリユイ派は、会費を納入していないマジョラルの投票権は無効であるという取り決めを持ち出したため、両派の勢力は拮抗した。ドゥヴォリユイは同時開催の「総会」出席を口実に休会を宣言し、ドゥヴォリユイ派のマジョラルたちとともに、「コンシストワール」の議場から退場したが、ドゥ・ヴィルスヌーヴの策謀により、反ドゥヴォリユイ派のマジョラルたちのみで「コンシストワール」を続行し、4人のマジョラルを選出してしまったのである。当然、ドゥヴォリユイ派はこれに抗議したが、結局受け入れられることはなかった。
- 104) *Ibid.*, p.129.
- 105) *Ibid.*, pp.132-134.
- 106) *Ibid.*, pp.134-135.
- 107) *Ibid.*, pp.135-136.

「フェリブリージュ」運動の形成とその理念（福留）

108) Barsotti, *op.cit.*, p.11.

109) *Ibid.*

110) *Ibid.*

111) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.157.

（福留 邦浩，立命館大学国際関係研究科研究生）

Reexamination of the Félibrige from the viewpoint of the political alignment of its members

The Félibrige was a literary association founded in 1854 near Avignon, in order to revive the Occitan language. In that sense, this movement is quite a cultural activity. However, this paper discusses this movement by viewing the political alignment of its members from the beginning of the movement until 1914.

The character of this movement was officially apolitical, but it does not mean that all of the members were indifferent to politics. They differed from each other in their political attitudes. Some were republicans and some royalists. To protect the Félibrige from dissolution, they maintained an apolitical attitude within the association. However, some of them were active in some political issues. They began some factional activities, belonging to the Félibrige.

They advocated federal thoughts so as to object to the centralism of the French Government: Frédéric Mistral, Louis-Xavier de Ricard, Charles Maurras, Pierre Devoluy and Christian de Villeneuve-Esclapon. This paper follows their federal ideas chronologically.

(FUKUDOME, Kunihiro, Doctoral Research Student, Graduate School of International Relations,
Ritsumeikan University)